銃後の母

松下　幹生

寝静まってる　春の宵時
突然ドンドン　戸を叩く音
何事か？と　出てみれば
役場の人が　立っていた
その手にあるは　赤紙一枚

父が一言　ついに来たかと…
五つの僕には　分からなかった
母は父の背に　すがり付き
死んだらあかん！と　泣きじゃくる
それでも聞こえる　おめでとうの声

二週間後に　父は出兵（たびだ）ち
気抜けた母の　背中を摩する
やがて空襲　襲い来て
僕を抱きしめ　震える母
あんた帰って！と　泣き叫ぶ母